跡の一覽圖が九州・中國・近畿・中部・關東に三分せられて收められてあり、無味乾燥な遺跡地名を地圖の上で一見し得ることも周到な用意として賞すべきである。たゞこれは欲を云ふと縮尺が大きすぎた爲に地理學的な解釋を更に遺跡地に施さうとする者にとつては充分でない憾がある。次ぎに本書は費用の關係からでもあらうが、あくまで土器の聚成圖であつて遺跡の聚成圖でないことも見方によつては物足りなさを感ぜしむるものがある。即ち此の限りに於いて他の伴出遺物に就いては讀者は改めて文獻その他を見かへさねばならないからである。元來聚成圖(コルプス)は故濱田博士が渡歐中ペトリー教授の幾多の業績に刺戟されて、日本に於いてもこれが必要を痛感し、歸朝後既に京都大學の研究報告書にて實例を示された所のものである。同研究報告第三冊に收錄の梅原助教授の彌生式土器圖錄を始め、以後發表の數々の聚成圖がそれで研究者に便宜をあたへ來た事はいふ迄もない。東京考古學會の同人が更に發展せしめ時代に應じたこの聚成圖を作られたことは學界の等しく感謝する所であらう。なほこの土器の聚成圖を主として鉢、壺、甕或は高杯、小形大形土器等の形に分類せられてゐて、從來同人諸氏が近畿その他の土器から組立てた編年即ち遠賀川式櫛目式、穗積式の名稱概念の下に作成してない事も注意せらるべきであらう。私等はむしろ複雜の中のより大きな單純がこの聚成の中から生れ出づることを思ふ者として、上記の從來の編年をしりぞけて形態に先づ依つた態度を多とせねばならない。終りにこの圖錄を見てゐると彌生式土器にも繩紋土器と同樣に否それ以上に共通なものに統一され乍らも個別性を地域に於いて夫々有してゐる事實を知るのである。森本氏が言つた低地の遺跡換言せば定着(セツテル)の文化が有する樣々な樣相をこの圖錄に於いて模樣、器形の上に於いてさへ發見して、私は現在學界の彌生式文化の研究がなほ一層歷史的な立場で考察されねばならない事を深く感じるのである。それらが解說編にて如何に編著者により取扱はれるか、吾人はそれを期待するものである。(東京考古學會發行、定價續篇共一五・〇〇)〔藤岡謙二郎〕

天平地寶

帝室博物館編

奈良時代の研究は主として文獻に俟たねばならないが、個別的事象乃至地方の情況を知悉する上では、當代の出土品は甚だ重要な位置を占めてをり、文獻の缺を補ふことは僅少ではないのである。この意味で帝室博物館が昭和十一年四月、奈良時代出土品展覽會を開催して、多數の資料を集められたことは、當該文化の認識を深め、研究の上に一の刷新を齎した點で洵に時宜に適した企てゞあつた。然も今回石田茂作氏の盡力により、以上の出土品を中心とし、更に當時都合で陳列し得なかつた逸品を加へた豪華な圖錄が見事完成され、一は不幸にして同展覽會を觀る機會を失した人々の觀覽に供へ、一は史料的、美術的に價値高い出土品を一括して記錄せられた事は實に學界の美擧と謂はねばならない。

本書は菊倍版全百十六葉のコロタイプ圖版を中心とするもので

出土品を種類別に掲載し、金石文の或物では拓本を添へる懇切さがある。先づ墓誌、骨壺より始まり金銅佛、塑像、塼物、佛具、鏡鑑、大刃、玉類、革帶裝飾品、印、陶器、古錢、瓦塔、風鐸、鴟尾、瓦、塼、石像に至つてをり、寫眞及び印刷は頗る鮮明であつて餘す所がない。此等を通觀したゞけで奈良時代出土品に對する得難い知識を抱ける事は本書のもつ絶大な强味である。

更に本書をして錦上花を添ふるものは卷末に附された石田氏の執筆に係かる『出土品より見たる奈良時代の文化』及び『圖版解說』である。前者は石田氏の體系を簡明に記載された點で甚だ注目すべきものであり、後者は各遺物の寸法、形狀を記載して圖版を補充すると共に簡潔な考證を添へたもので、圖版と共に併讀さるべき述作である。かやうに本書は豐富な圖版と要領を得た圖版解說と以上に關する概說の三部から成り、這種刊行物として間然する所ないのである。たゞ慾を言へば、一遺跡の出土品がばら〳〵に掲載されてゐて、一括遺物として觀る上で不便である。此等は出土地別の目次によつて整理されるであらう。また圖版解說では各遺物に就いて從來發表された文獻を掲示してほしかつた。けれども此れは贅を得てまた蜀を望むが如き類ひであつて、奈良時代研究上に占める本書の重要さはかゝる微瑕によつて固より損はれるものではないのである。(菊四倍版、圖版一一六葉、原色版一葉、附錄六三頁、東京帝室博物館發行、定價二〇・〇〇)(角田文衛)

哲學及び宗教と其歷史

——波多野精一先生獻呈論文集——

石原　謙編

わたしの圓を亂してくれるな、と古のある哲人は云つたといふ。まことに學問研究に於いては自己の學問領域に忠實であり謙虛であり、徒らに他に干涉しないことこそ、學徒として何よりも心すべき義務であらう。しかし、自己の學問領域に忠實であることがその領域の殼の中にのみ閉ぢこもり、他の領域には目をふさぐことや、或は又その領域内に於いてのみ通用する眼でもつて、他の領域のものを觀察し、判斷することであつてはならない。それは決して眞に謙虛なのではなく、むしろ罰せらるべき一の傲慢(ヒュブリス)であり、越權でもある。學に眞に謙虛であるためには排他的・閉鎖的な態度ではなく、却つて受容的・開放的な態度でなければならぬ。學問のモンロー主義はきびしく排擊されねばならない。あらゆる他の學問領域について强い關心をもつことは眞に自己の學に謙虛なることではなからうか。

もちろん、徒らな多學博識や衒學を讃へるのではない。云ふ心は他の領域に對する鋭き觸覺と深き關心とであり、理解せんとする眞摯な態度である。學を廣くすることは、學を深く豐かにすることへ轉換の一つの道ではなからうか。

近時あらゆる方面に獨善、獨斷が横行し畸形的な「專門家」が跋扈してゐるかに感ぜしめる。學問の發達による極度の分化がかゝ